

第2回日本赤十字看護学会学術集会

会長講演

次世代を担う若者を育てよう

Let's Nurture Young People
Who can Shoulder the Load of the Next Era

会長 濱田 悦子 HAMADA Etsuko (日本赤十字看護大学)



座長 平澤 美恵子
HIRASAWA Mieko
(日本赤十字看護大学)

I. 高等教育を巡る状況

我が国における高等教育への進学率は、大学審議会答申によると、平成21年度で51.8%に上昇し、全志願者に対する収容能力は100%になると試算され、大学の大衆化がますます加速化されることが言われている(図1)。M.Trow(1976)は高等教育の発達段階について、同年齢者の進学者

比率が15%以下の場合をエリート型、15～50%未満をマス（大衆）型、50%以上をユニバーサル（万人）型と3つに区分している。現在の日本における41%という進学率はマス型であり、平成21年度はユニバーサル型という状況になる。

エリート型は、教育研究の高度化が進んだ昭和20年代以前であった。その後、徐々にマス型に変化し、教育の機会ができるだけ均等に拡大されていった。さらに、ユニバーサルアクセス型として、平等主義または福祉型で、インターネット、情報の提供によって学生が大学を選択していく時代になる。それは、むしろ大学の時間・空間の拘束性に縛られたくないというところまで変化し、必ずしも同年代ではなく、社会人、主婦等が生涯学習として教育を受講し単位を修得する型となる。現代のアメリカの状況がユニバーサル型である。

我が国の特徴として、3つの型が段階的に発展した場合においても常に3つの型が大学では並列して存在していること、各型の原理は相反するものであることを認識してほしい。このような状況下にある大学では、学生の知的興味、関心領域が極めて多様であり、その上、能力の多様化が一段と進むことが予測される。一方、21世紀における我が国の高等教育への期待が高まる中で、専門的知識・技術も高度化、複雑化、専門化、国際化が進み、きわめて多様な大学ができる時代になるであろう。さらに情報化の進展に伴い、学外で自由に学習する機会も多く、よりグローバル化が進み、厳しい競争的環境の中で生き残るために大学教育のあり方を問われる時代でもある。ここで、大学の大衆化を否定的に考えているのではなく、むしろ初等、中等教育の混乱を高等教育で担うことを考える時期にきているのではなからうか。

現代の若者（10代後半から20代前半の学生）は少子化時代、過保護・過干渉時代、高学歴化時代に育ち、マスコミの氾濫、社会規範や意識の変化、価値観の多様化等々、一時代以前とは異なった特性を持つものと考えられる。

21世紀の医療を担う看護者は、こうした時代を生きる若者（学生）である。これからの看護学の進むべき方向性を考えるに、その担い手としての学生について、理解を深めることが必要不可欠なのではないだろうか。看護学教育においても今までとは違った観点から教育に対する基本的な姿勢の見直しが求められてくるものと考えられる。

Ⅱ. 学生の実態

文部科学省の高等教育局が実施した、国公私立の「大学における学生生活の充実に関する調査」（2000）と私立看護系大学協会が行った「学生の生活向上に関する調査」（2000）等の報告から、学生の特徴をまとめた。

A. 一般学生について

学生は、専門学部への帰属意識が希薄なまま、一つの学生集団に身を置き、「自分さがし」をしている。その関係からだろうか、情熱的な取り組み対象が見出せず、精神的失業状態に落ち込んでいる学生が多いと言われている。その上、知的好奇心の弱い学生は、学習意欲も低く、物事に対する理解力や取り組みへの自信を失いつつある。

また、自由に「個」を重視する風潮の中で育ち、外部からの圧力には非常に敏感に反応している。むしろ、自分の力でという内的発動性を重んじる自分志向の若者像が浮き彫りにされている。

他方、インターネットやメールなどの情報手段を日常的に用い、質の高い情報にアクセスしやすいことを活用している一方で、直接大学の教員や学生とふれあう必要性がますます希薄になる傾向が現れ始めている。

子どもの頃から、今の学生は人との関わりや実体験の機会に乏しく、すぐ親に依存する傾向も指

摘されている。「人と上手につきあえない」、「人のうわさが気になる」、「無気力」といった自分の将来性、進路に対する不安など、様々な問題を90%以上の学生は悩んでいる。

B. 看護学生について

看護学を学んでいる学生では、「大学に入学して良かった」ことに対して、約60%が「友人を得た」、「専門知識や技術を身につけた」と答えている。ある特定の目的教育を受けているためか、従来から80%を超える学生がこういった認識を持っていたが、現在では下降の傾向にある。また、一般学生と同様、10%前後の学生が「アルバイト、趣味、スポーツをして楽しむ」、「他者と協力して何かを達成できた体験」、「先生と親しくなれた」、「本を読む機会が増えた」ということを挙げていた。

次に「大学の教育内容や方法に対する期待、要望」については、「今の資格取得条件による拘束性の強いカリキュラムでは勉強する意欲がわからない」、「もっと多くの科目を設定し選択できる、自由意志を反映できるカリキュラムにしてほしい」、「専門教育の系統性、統合性、一貫性のあるカリキュラムにしてほしい」、「教養科目、総合科目の充実を図ってほしい」、「単位互換制度を早急に取り入れ活発に組織化してほしい」、等が挙げられた。また方法については、「授業評価を積極的に導入し、学生の反応に対して、教員はどう対応しているのか授業計画の具体的なシラバスを早めに提示してほしい」、「教員の授業にも工夫をし、具体的事象を応用した実践的イメージがもてる授業をしてほしい。そのために実践家を活用した授業をしてはどうだろうか」、「教材資料の作り方を工夫してほしい」、「演習、実習時間を増加できないのか」等が挙げられていた。数値的には約20%と最も少ないが、「学生の理解度を把握した授業をしてほしい」、「教員のペースの授業なら授業に参加しなくともよいのではないか」等といった回答があり、学生の反応には厳しいものがある。

看護学生の中には「単に専門知識、技術を習得するのではなく、視野を広げ、ものの見方、考え方を学び、教養を深めるために大学にきた」との意見がある。

不安、悩みについては一般学生と同様に、ほとんどの看護学生(90%)が抱えている。その内容をみると、看護学生の特徴として、実習を経験する中で専門職への適性について真剣に悩み、また大きなストレスも抱えている状況が現れていた。また、約45%の者が「授業についていけない」と答えていた。不安や悩みの相談相手として、90%以上の学生が友人を挙げ、次いで60%の学生が家族を挙げている一方で、大学の教職員を挙げているのは17.5%とごく少数の学生である。学生と教員との関係が低いことを示す比率ではあるが、一般学生では大学の教員に相談することがほとんどないという現象を考えれば、残っていることは特記したい。このことはカウンセラーを専任でおている大学が少ないことにも関係していると考えられる。

以上のように、現代の看護学生のほとんどは何らかの不安、悩みを持ちながら、その中でも特に授業にもついていけないことへの不安を抱く学生が非常に多くなってきていることが明らかになった。

C. アメリカの看護学生について

過去5年間の「Journal of Nursing Education」と「Nursing Educator」の看護学生に関する文献検討をした結果、興味深いものがあったので報告したい。

1. 看護学部生、薬学部生、医学部生、社会福祉学部生の中で、ストレスの強さと要因を測定した結果、看護学部生は他学部の学生に比べて有意に強いストレスを持ち、その要因は主に臨床実習に伴うものであることが明らかにされている。(Beck,B.L.et.al.,1997)

2. 看護学生のバーンアウトについて最高学年の4年生を対象に現象学的アプローチで検討した結果、9つの要素が抽出されている。以下は、日本の学生と非常に類似性があるのではないかと思える要素である。「タスク、課題が多くてどこから処理していくのか困惑し、提出時期が同じ日時であることに対して耐えられないプレッシャーを感じる」、「身体的にすぐ疲労を感じ、慢性疲労感があり不

眠やイライラという現象を生じている」、「感情的な圧迫感、何かにしめつけられる感じがある」、「集中力の欠如」、「モチベーションが低下する」、「対人関係が非常に悪くなる」などという現象があった。これらの状況が実習での患者ケアに対して直接現れては困ると教員は危惧していた。(Beck,C.T.,1995)

3. 授業を妨害し授業破壊をする学生が出現している。その破壊の仕方も教員の授業がつまらないので、教員の前に出て自分の興味、関心のあることを学生が授業するという状況である。現在、教員間で授業妨害対策のマニュアルを作成中とのことである (Deering,C.G. & Shaw,S.J.,1997)。日本では初等、中等教育において学級崩壊という現象が生じているが、日本の高等教育機関でも起こらないとは限らないのではなかろうか。

4. 最近、経験や年齢の違う学生が同時に学習している。アメリカでは経験の少ない看護学生が非常に内向的で発言も少なくネガティブな傾向になっている。経験豊かな学生に押し切れ、何か小さな存在になっているので、むしろリラックスでき、自由に授業に参加できるような学習方法を検討している (Leonard,T.C. & Johnson,J.Y.,1998)。我が国ではどうであろうか。編入学生は一般学生にどのような影響を与えているのだろうか。

一方、日米の看護学生の中には、社会において自己の才能を活かし活躍したいと望んでいる者も多い。また、自分の身一つで生活できる資格を持ちたい、自分のやる気を認め、他者を思いやる、他人のために自分を尽くしたいという気持ちを持っている学生も存在している。このような特性をもつ学生を是非看護界に迎え入れようとする場合に、どのような選抜方法、教育方法があるのだろうか。学生が自ら成長するためにどのように考えたらよいのだろうか。学生と共に成長し合えるような関係をどのように作っていくことが可能であろうか。

Ⅲ. 「教師中心」から「学生中心」の大学へ

従来大学はアカデミズムを追求し、大学としての主要な機能は研究にあった。むしろ、教員は研究者としての役割期待が大きく、まさに学問のセンターとして存在していた。また、教員の評価も研究業績中心で行われていた。現在に至っても、その風潮が強く残っている。しかし、学生の多様な能力や心の問題を抱えている状況においては、きめ細かな教育・指導に重点をおく学生の教育中心に、学生が求めているニーズを満たす大学に変革しなければならないのではなかろうか。

平成10年10月の大学審議会答申によると、大学は社会に貢献しうる人材を育成し、社会が求める高い付加価値を身につけた卒業生を送り出す社会的責任があると言われている。

このことから大学が教員の研究中心から教育中心へと意識変革し、学生の立場に立った教育・指導が求められている。心の問題を抱える多様な学生に対して、教員と人間的ふれあいを通して、価値観、道徳観、責任感という高い倫理性まで求めるような教育をすることは大変なことであろう。また、学生は意思伝達の仕方、忍耐力、決断力、適応力等、臨地実習を通して学んでもいる。この際に、学生が他者と協調し、バランスのとれる成熟した人間に成長できるような教育・指導をすることは、教員に相当なエネルギーを消費し、そのための勉強は研究以上のことであろう。

現在の大学では、以上の通り教員の意識改革が急務で求められている。以下に、それらに対する具体的な提案を挙げたい。

A. ファカルティ・ディベロップメント(FD)

学生に対応した教育・指導を充実させるためには、全学的に組織的にこのファカルティ・ディベロップメントを進める必要がある。この場合は、単に授業内容・方法を研修するのではなく、学生の人間的な成長を図るためには、学生の理解の仕方についても研修内容に加えることも重要である。

また、生活指導については、学生と接する機会が多い事務職員の協力を得られることも必要であろう。特に、学生の対応時に学生の意欲を減退させずに励ますことができるような事務職員を育成することが早急に求められている。

以上のことから、教員と事務職員の連携を密にし、学生に適切な指導ができるように、立場を異にした者が相互に補完し合える体制を鍛えられるような研修企画をし、お互いに切磋琢磨していくことが重要である。

B. ティーチング・アシスタント (TA)

看護実習の指導については、大学院生を活用すると、教育活動の活性化や充実に大きく寄与するものがある。院生の主体的な学び方や姿勢・責任感等から学生は多くの刺激、影響を受けている。また、学部生同士についても、上級生に下級生の実習への取り組みや卒論のテーマ等についてガイダンスをさせることによって、指導する側も受ける側も双方に多くの学びが生じている。

このようなティーチング・アシスタントとして教育・指導の補助業務を通して、学生は自立した人間として成長発達する機会になりうるものとする。(この際には一定の責任をもたせることが重要となる。)

C. その他

カリキュラムの編成の仕方においては、学年の壁を取り除き、多学年のミックスクラスで授業やゼミナール等を進める工夫をし、学生間相互の刺激をうけやすいシステムを積極的に取り入れてはどうか。

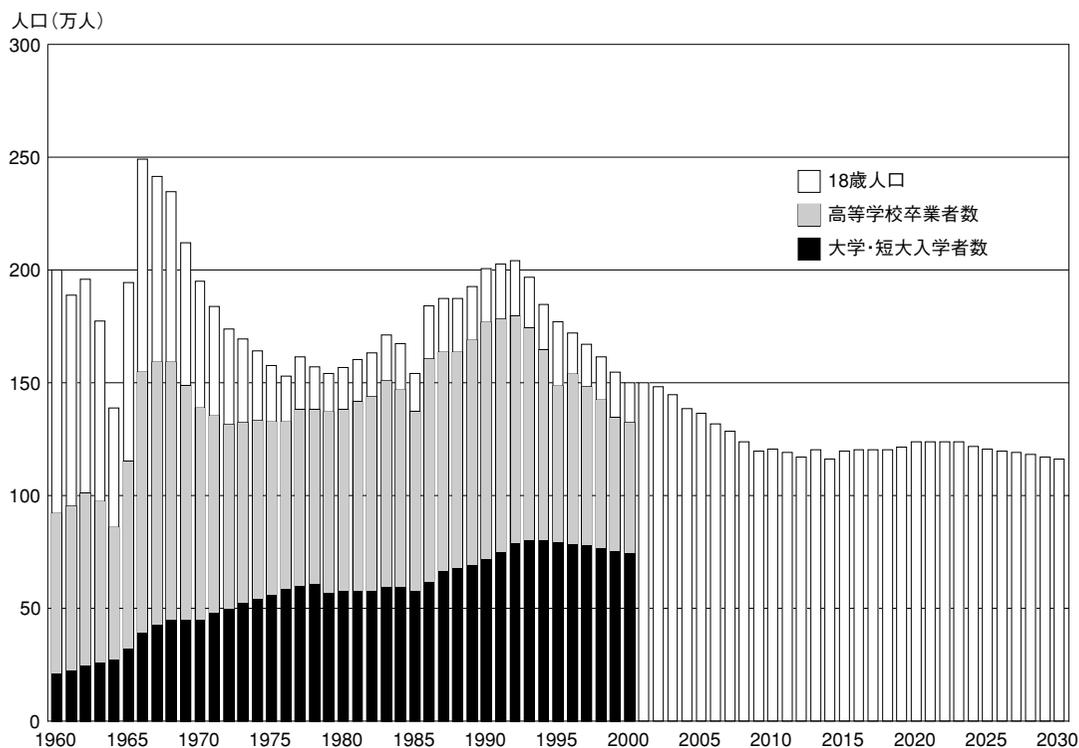


図1. 18歳人口の推移 (文部科学省高等教育局,2000を参照し作成)

とかく、大学生は大人であり子どもではないという前提に立ち、「何かをする自由」も学生個々の問題として突き放すことも可能である。しかし、学生が精神的失業状態から脱却して潜在的な精神的活力を発揮して、自己を見だし、自己変革の機会を与えるだけの教育環境を作らなければならないだろう。

看護学は、何らかの障害により苦痛・苦悩を背負っている人々を支援してゆく学問である。看護学では、対象とする一人ひとりの独自性や価値観を尊重し、それぞれ個別に、その人の成長発達・自己実現を日々の生活の場において支援する方法を学ぶことにある。

赤十字に学び、働く者には、このような看護学を背景から支える礎として赤十字の7原則がある。すなわち、人道、公平、中立、独立、奉仕、単一、世界性である。これらは、人間として生きて行くための一つの倫理綱領として指標になるものと考えている。科学技術や経済が発展しつつありながら、人命が軽んじられがちな現代こそ、赤十字の建学精神は、ますます重要となるであろう。

学生一人ひとりが先ず自分自身と友人の独自性に気づき、各々の自己実現と価値観を助長するため相互に切磋琢磨し合いながら学んでゆくことにある。

看護学には、自分で考える頭脳と感じる心、すなわち、ものごとを分析的、客観的に思考する力と直観的に感受する力等の統合された判断力が求められる。したがって、今後の看護学教育のあり方を探る上で、若者（学生）が考えることを支える教育、すなわち、自分を育てる力、生きる力を培う教育のあり方を、臨床の指導的立場にある人、教職にあたる人たちが双方で検討していく必要があるのではなかろうか。

文献

- Beck, D. L., Hackett, M. B., Srivastava, R. et al. (1997). Perceived level and sources of stress in university professional schools. *Journal of Nursing Education*. 36(4), 180-186.
- Cheryl Tatano Beck, C. T. (1995). Burnout in undergraduate nursing students. *Nurse Educator*. 20(4), 19-23.
- Deering, C. G. & Shaw, S. J. (1997). Dealing with difficult students in the classroom. *Nurse Educator*. 22(5), 19-23.
- 河合千恵子他 (2000). 学生の生活向上に関する調査研究私立看護系大学協会事業報告書, 31-59.
- 喜多村和之 (2001). これからの入学広報 大学の個性化—「教師中心の大学」から「学生本位の大学へ」—, 大学入試センター平成12年度大学入学報告セミナー報告書 1-25.
- Leonard, T. C. & Johnson, J. Y. (1998). The reticent student: Implications for nurse educators. *Journal of Nursing Education*. 37(5), 213-215.
- 文部科学省高等教育局 大学における学生生活の充実に関する調査研究会 (2000). 大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—.
- 日本私立大学連盟学生部会 (1997). 学生生活白書 新しい大学のあり方を求めて, 開成出版.
- 日本赤十字看護大学 (2001). 第3回学生生活実態調査報告書2000年度.
- Trow, M. (1976) / 天野郁夫・喜多村和之 (1976). 高学歴社会の大学, 東京大学出版会.

